

ヘラクレイトスの《リヴァー・パラドクス》

嶋 崎 隆

A Ⅱギリシア哲学研究者

B Ⅱ分析哲学者

C Ⅱ唯物弁証法研究者

—— A氏の研究室にて

一 ヘラクレイトスという人物

A やあ、しばらく。こうして三人そろって会うなんて、久しぶりだね。

B こういった学会のときぐらいかね。

C 実はいま、弁証法的な立場から古代ギリシアからの哲学史を考えているんだ。そこでいろいろとお聞きしたいと思ってね。エフェソス出身のヘラクレイトス(前五四四—四八八年頃)の思想は、やはりとても興味深い。

かれはピタゴラスよりもあとのひとで、エレア派のアルメニデス(前五三九—四八〇年頃)とほぼ同時代の人間だね。

エフェソスはギリシア哲学発生の地のひとつだ。万物の原理(*αρχή*)は水なりといったタールレス(前六四〇—五六二年頃)はミレトスの出身だが、そのミレトスの北にエフェソスがある。かれが自然哲学を中心とするのもうなずける。しかし、かれの主張ほどひと筋縄でいかないうものはない。かれは後世、「闇のひと」と呼ばれたほど、晦渋な文体で書く。ヘラクレイトスはまた「泣く哲学者」とも称されている。どうもイメージが暗いね。

A そのとおりで。かれはただ理解力のある者にだけわかるように、わざと不明瞭に書いたとも伝えられる。か

れは鬱病的気質だったらしい。それと、かれが貴族の出身だったことも関係するだろう。

C ヘラクレイトスは当時の政治状況にいや気がさして、政治に参加するよりも子供とカルタ遊びをしている方がましだといったそうだ。それどころか、エフェソスの人間なんて成人は皆、首をくくり、国家を未成年者の手に渡すべきだなどと、過激なことを述べたらしい。

B ヘラクレイトスで有名なのは「万物は流転する」(*panta paei*) だろう。日本でいうと、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」で始まる『平家物語』や、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし」という『方丈記』の世界かな。

C ヘラクレイトスの生きた時代もペルシアとの戦争がうち続くし、『方丈記』や『平家物語』も平安から鎌倉へと戦乱の続く時代だったしね。この点で、激動の時代の反映として共通点はある。

A しかし、ギリシア哲学の生成流転の思想と日本での仏教的無常観とを、まったく同一視できるかどうか。

C あのヘーゲルもヘラクレイトスの生成流転の思想を

強調した。一般にヘーゲルはヘラクレイトスを高く評価し、『哲学史』のなかでも、かれの命題で自分の論理学のなかにとりいれなかったものはないとか、ここでわれわれは弁証法の祖国をみいだすとかいっている<sup>(1)</sup>。日本では、「初期唯物論の形成」という古在由重氏の論文があるが、これはマルクス主義的観点から書かれたもので、デモクリトス(前四六〇—三七〇年頃)までのギリシア哲学を扱っている。いま読んでみてもすぐれたものだが、このなかのヘラクレイトスに関する叙述も力強さに満ちている<sup>(2)</sup>。最近では、東独のヘルムート・ザイデルが『タレスからプラトンまで』という著作で、ヘラクレイトスを唯物弁証法の立場からわかり易く展開している<sup>(3)</sup>。いや、それよりもまず、レーニンによる、ラッサール『エフェソスの暗いひと・ヘラクレイトスの哲学』への批判的注釈が重要だろう<sup>(4)</sup>。

## 二 ヘラクレイトスの断片

A 水をさすようだけれど、最近の研究では、「万物は流転する」はヘラクレイトス自身が直接に述べた言葉とはされていない。ディールス／クランツ『ソクラテス以

前の哲学者の断片集<sup>(5)</sup>でも、チャールズ・カーン『ヘラクレイトスの芸術と思想』<sup>(6)</sup>でも採用されていない。ヘラクレイトスのパンタ・レイはシンブリキオス(六世紀)の著作ではじめて登場する。ふつうプラトンの対話篇『クラテュロス』のなかで、ヘラクレイトスの言葉として「万物は移ろい (*ἡ ἀρχὴ κινήσει*)、かつとどまることなし<sup>(7)</sup>」といわれたことがあげられる。しかし、このパンタ・コレイすらもヘラクレイトス自身の言葉かどうかは疑わしい<sup>(8)</sup>。

C なるほど、ややこしい文献学的研究があるわけだ。ところで、ヘラクレイトスの思想はどのようにまとめられるのかね。

A 彼の断片集はもともと一冊の本がばらばらになったのか、それとも二冊以上の本が分散したのかについては論争がある。いずれにしても、ジョン・バーネットはデイルス/クラッツが断片を系統的に配列しなかつたことを批判し、自分で配列を変えている。そうはつきり断定できるわけではないが、バーネットは人間論・感覚論 ↓ 自然哲学 ↓ 対立者の結合論 ↓ 倫理学の順に配列しているように思える。

ヘラクレイトスはこの宇宙 (*κόσμος*) を支配している原理を「永遠に生きている火」(*ἀείων ἕρως*) と考えた。

C その断片はとても重要だね。全体的にはこうなっている。「宇宙、つまりすべてのものからなるひとつのものは、神にせよひとにせよ、だれがつくったものでもなく、それはきまっただけ (*ἡ ἀρχὴ κινήσει*) 燃え、きまっただけ消えながら、永遠に生きている火であったし、現在もそうであるし、将来もそうであろう。」<sup>(30)</sup>

この箇所はレーニンが「弁証法的唯物論の諸原理の非常にすぐれた叙述」と称賛しているところなんだ。この「宇宙」とは神や人間がつくったものでなく、永遠に存在し続ける物質的世界のことではないか。まさに物質(自然)の永遠性を主張する唯物論そのものだ。そして、その宇宙には、火の永遠の運動としての法則性が貫いている……。

A 炎はたえず中味を変えながらも同一にとどまっている。火のイメージはヘラクレイトスの生成流転の思想に合ったのだろう。またかれは「万物は火の交換物であり、火は万物の交換物である……」<sup>(90)</sup>ともいう。かれは

この「火」の思想をさらに展開し、火が圧縮され、気となりさらに水となり、そして水が凝固すると土となると考えた。これが「下り道」(ὄδος κάτω)といわれ、その逆のプロセスが「上り道」(ὄδος ἄνω)だ (Al. Diog. IX (8). (9))。世界はたえず上昇し下降する生成と流動のプロセスとみられ、火はその象徴だろう。

B 「火」とは現代的にいえば、エネルギーのことではないか。エネルギーこそ万物の生成と変化の原動力といえる。

A なるほどね。ところでヘラクレイトスのなかにある弁証法というのは、具体的にどのようなものか。

C そうだね。かれのいくつかの断片を現代弁証法から位置づけてみようか。「冷いものが熱くなり、熱いものが冷くなる。湿ったものが乾き、乾いたものが湿る」(126)——ここには「対立物の相互転化」の弁証法がある。「戦<sup>ス</sup> (πόλεμος) は万物の父であり、万物の王である」(53)——これは「対立物の闘争」の重要性を語っているね。戦乱の時代に生きたヘラクレイトスの実感だろう。「田周の場合、初めと終わりは共通である」(103)

——これは「対立物の合致」といってよい。「病氣は健

康を、飢餓は飽食を、疲労は休息を快く、よいものにする」(111)——「対立物の相関関係」がここに示されている。実際、病氣になつてはじめて健康のありがたさがわかるからね。

A こんな断片もあるね。「それが食い違いながら、自分自身とどうして一致するのかをかれらは知らない。そこには弓とリュラ琴のそのように、逆に向き合った調和 (ἁρμόνομος ἀγωνία) がある」(51)この断片にはいくつかの解釈があるが、どう考えたらよいのかな。

C これは「対立物の調和」の弁証法を示していると思う。たとえば、弓では、弦と弓幹とは逆の方向にひっぱられて、あの形を保っている。そして矢を弓につがえてひきしぼり、放つ。そこでは逆向きのふたつの力が協力・調和して、矢を飛ばすエネルギーとなる。弦が弱いと弓幹の力に負けて切れてしまふし、弓幹が弱ければ、矢は遠くへ飛ばない。リュラ琴はまあ、ハーブやギターに似た楽器だが、この場合も同様だろう。リュラ琴がたえなる音色を奏するのは、弦の復原力と指のひっぱる力とが協力・調和しあうからだろう。

A なるほどね。思うに、ヘラクレイトスは変化や運動

のなかにある全体をみよといいたかたのではないか。きみの弁証法的説明を聞いていてそう思った。上り道がなければ下り道もないし、熱さもなければ寒さもない。世界を全体的に支配しているのは「火」であり、ロゴス、つまり一定の法則性やメトロン——「尺度」、「規則」、

「比例」などの意味を含む——をもつものなのだ。だから、ヘラクレイトスは単なる相対主義者ではない。

かれは「わたくしは自分自身を探究してきた」(101)ともいう。ヘラクレイトスにとって、宇宙のメカニズムを探ることと人間およびその倫理を自覚することとは同一だったらしい。<sup>(11)</sup>「聞いても理解しない者は、聾のようである」(95)などのいくつかの断片は、部分にこだわり全体を忘れたり、また現象の奥にある本質(ロゴス)を洞察しない人間の愚かさへの批判とみられる。「自然(本性 *physis*)は隠れることを好む」(12)のものであって、そう簡単にはつかめない。

C きみがうまくまとめてくれたように、ヘラクレイトスはまさに弁証法の先駆者のわけだ。もっともかれの弁証法は、大衆の立場に立った革命の弁証法というよりも、孤高でニヒリステイックな面があったと思うけれど。<sup>(12)</sup>

B 分析哲学者のラッセルもヘラクレイトスについて、「ひと好きのする人物」(amiable character)にはみえず、民主的人間の正反対だと評価しているよ。<sup>(13)</sup>

### 三 ヘラクレイトス是非論理か

A ヘラクレイトスは宇宙(コスモス)の構造と人間(ミクロ・コスモス)のあり方を同一にみたようだが、その点、ヘーゲルの「存在と思考の同一性」という主張と関係がありそうだが、どうかな。

C たしかにそのとおりだ。ヘーゲルの基本主張は「存在(客観的实在)と思考(精神、観念)は同一である」にまとめられる。わかり易くいうと、外界の自然存在もつきつめていくと、人間と同様に精神的なものにほかならないということだ。たしかに、自然はわれわれ人間が驚くほどの巧みなメカニズムと神秘性を隠しているからね。ヘーゲルにとって大切なことは、だから全存在が実は精神的なものであることの洞察だ。ヘーゲルが観念論をとった理由もここにある。けれども、ヘラクレイトスもヘーゲルとまったく同様の観念論者なのだろうか。

A そうはいえないだろうね。そこには、イオニア自然

哲学の伝統をひいたギリシア思想と近代のドイツ観念論との歴史的へだたりがある。

C ジョージ・ノヴァクというマルクス主義哲学者もヘラクレイトスを唯物論者とみているしね。<sup>(14)</sup> いずれにしても、かれの思想はヘーゲルが強調したように、弁証法的深みをもっている。

B きみはいま「弁証法的深み」といったが、そこが問題ではないのかな。論理にはつねに正確さと明晰さが必要で、ヘラクレイトスはどうもそこをあいまいにして、何かわかったようでわからないことをいってひとをありがたがらせる、いや煙にまく。

分析哲学系統の哲学者カール・ポッパーが厳しく批判したように、弁証法はやや非論理的ではないか。ヘラクレイトスは「闇のひと」といわれたが、曖昧模糊とした論理は困るよ。その点、同じギリシアの哲学者でも、デモクリトスと対照的だね。かれは「笑う哲学者」といわれ、事物の変化や運動を扱いながらも原子論<sup>アトミズム</sup>を貫こうとした。現代でいえば、事物の運動や自己組織化のメカニズムは、ノーバート・ウィーナーのサイバネティクスやフォン・ベルタランフィのシステム論として科学的に形

成されてきている。こうした立場こそが弁証法のいいところだったことも包摂できるのではないか。

話が少し脇道へそれたが、たとえば、ヘラクレイトスの「われわれは同じ河にはいるともにはいらぬ」などの断片はとくに曖昧だ。このままでは(無)矛盾律に違反する。矛盾律は論理矛盾を犯してはいけない、論理的首尾一貫性を守れというからね。エレア派のバルメニデスがヘラクレイトス派を批判して「両頭の怪物ども」<sup>(15)</sup> (Dikpawov) といい、矛盾律を擁護したのはまったく正しいと思う。

A ヘラクレイトスと矛盾律との関係だけだと、実はすでにアリストテレスが矛盾律を定式化した箇所<sup>(16)</sup>で言及している。『形而上学』では矛盾律はこう定式化される。

同じもの〔同じ属性・述語〕が同時に、そしてまた同じ事情のもとで、同じもの〔同じ基体・主語〕に属しかつ属さないということは不可能である。<sup>(16)</sup>

だから、たとえば、「黄色」という属性がこのバラに属しかつ属さない」といったら、矛盾律を犯すことになってしまう。

B それは数学的論理学によって、つぎのように正確か

つ簡潔に記号化できるよ。

$\sim \exists (x)(P(x) \wedge \sim P(x))$   $\sim \equiv$ でない、 $\exists \equiv$ 存在

記号、 $x =$ 個体、 $P =$ 性質、 $\wedge =$ かつ

これは「 $x$ が $P$ であり、かつ $x$ が $P$ でないような $x$ は存在しない」と読める。アリストテレスは「 $A$ は $B$ に属する」という表現法をとったが、これは「 $B$ は $A$ である」と同一であり、ここでは「 $P(x)$ と表現される。 $P(x)$ と $\sim P(x)$ というまったく背反しあう命題が同時に立てられる現象こそ二律背反というものだが、このアンチノミーを矛盾律は禁止する。アンチノミーや論理矛盾は論理の破壊以外の何ものでもない！」

A まあ、そう興奮しないで。さっきのアリストテレスによれば、矛盾律を定式化したあとで、「同じものがありかつあらぬ」と信ずることは現実には不可能だから、ヘラクレイトス本人すらも本気でそういったとは信じられない、と述べている。とにかく、人間は矛盾律を犯しては絶対に考えられないわけだね。

実はほぼ同様のことが『形而上学』で、もう一箇所述べられているんだ。そこでアリストテレスは、もし対立するふたつの判断が同じ事物についてまったく等しく真

だということがありうるかと問われれば、ヘラクレイトスすらも「否」と答えざるをえないだろう、と指摘する。

B 矛盾律をすべての思考と学問の原理とするアリストテレスには大賛成だね。どうもぼくは最近、ヘーゲルやマルクスのいう弁証法とは、相手を心理的に——論理的にでなくてね——説得するためのレトリックの一種ではないかと思ってるくらいだ。弁証法のいう「対立物の統一」や「矛盾」というのは、レトリックでいうと「対義結合」や「逆説法」にあたるからね。少し話がずれるが、「何ごとのおわしますかは知らねども」(西行)というように、日本人は一般に論理の明晰さを嫌う傾向があるんじゃないかね。

C ウーン、手厳しいね。ぼくも論理に正確さや明晰さは必要とは思うけれど……。そうすると、ヘラクレイトスやヘーゲルの主張は、もうほとんど大言壮語、こじつけとたぶらかしの固まりになるのかねえ。だけど、さっきの《リヴァー・パラドクス》にも深い意味があると思われるし。

四 《リヴァー・パラドクス》の内容

A ヘラクレイトスの《リヴァー・パラドクス》といっても、どの命題をさすのかな。ディールス／クランツによると、三つの断片が関係する。それをつぎにあげてみようか。

断片12 Ⅱ かれらは同じ河にはいり、違った水が、また違った水が流れてくる。

断片49 a Ⅱ われわれは同じ河にはいりかつはいらないし、われわれは存在しかつ存在しない。

断片91 Ⅱ ヘラクレイトスによれば、ひとは同じ河に二度はいることはできない。ひとは移り行く水を二度と安定した形でつかめないし、その変化の鋭さと速さのために、物は拡散していきまた再び結びつき、そして再びとかあ、とどというのでなく、同時に集まりかつ分離する。

(傍点は筆者)

カーンの著作では、なぜか断片49 a は収録されていない。また断片91 は、必ずしもヘラクレイトス自身のものではなくて、バラフレイズされている可能性がある。

「同じ川に二度はいることはできない」という表現はあ

まりにも有名で、プラトン『クラテュロス』にも出てくる<sup>(18)</sup>。パンタ・レイとともに、この表現のオリジナリティは低いようだね。

B それにしても、やはり不明瞭だなあ。矛盾律にこだわるけれど、矛盾律は実はさっきよりも簡単に定式化できる。

~(P ∧ ~P) P = 任意の命題

これは「P かつ P でない」ということはない」と読める。これに従い、断片49 a を定式化しようか。

われわれは同じ河にはいる Ⅱ P

われわれは存在する Ⅱ Q

われわれは存在しない Ⅱ ~Q

こうすると、断片49 a は

(P ∧ ~P) ∧ (Q ∧ ~Q)

と定式化され、二度アンチノミーを重ねることによって二度も矛盾律を犯している。これはまったくの論理の破壊だ。

A まあ、その前にさっきの断片の説明をした方がいいね。

まず断片12だけけれど、カーンは詳しい説明をつけている。実はここにある河 (Fountain) はなぜか複数形だ。

単数形じゃないいけないのかな。それはともかく、全体の意味は、かれら、つまり河で水浴をするひとびとはひとつの同じ河にはいるわけだが、流れてくる水はつきからつきへと変わっていく。だが、それにもかかわらず、いや河の水がたえず流れるからこそ、それはひとつの河なのだろう。流水がなければ池か潮になってしまう。断片12はアンチノミー形式になっていないが、それでも一種のバラドクスを含んでいるね。

実はこの断片は別にも解釈できるんだ。それは「同じひとびとが河にはいり、違った水が……」というもので、つまり、「同じ」を「ひとびと」にかける。カーンによると、ヘラクレイトスはこの断片で、河のもつ同一性と水浴するひとびとの同一性をバラレルに考えているというんだが……<sup>(19)</sup>

C 実に弁証法的な深い発想だと思っただね。

A 断片49 aも前の断片と関係が深い。ひとつの河の内容容(水)はたえず変化しているから、「われわれは同じ河にはいりかつはいらない」という表現が生ずる。「わ

れわれは存在しかつ存在しない」については、さっきのカーンのいう河と人間とのバラレルの関係が生きる。河と同様に、実はわれわれ人間の物質的構成だって変化している。一定期間たてば、物質代謝のおかげで肉体的にすっかり入れ変わる。それでもわたくしはわたくしだからね。人間の自我の同一性のこうしたあり方を、「われわれは存在しかつ存在しない」といったのだろう。

断片91について。河の流れはたえず変化しているのだから、厳密に言えば、河は一瞬一瞬、別ものになっている。だとすれば、同じ河に二度とはいれないことになる。あとの説明は省略するけれど、たしかにここには万物流転の思想が鮮かに語られている。

カーンは断片12のすぐつぎに断片91をおいている。なぜなら、ひとつの河にはいると、たえず別の水が流れ寄せてくるから、したがって二度と同じ河にはいれない、と連続して読めるからだ。

C ウム、うまい説明だね。

B でも、何か煙にまかれた感じもする。とくにさっきの矛盾律との関係でね。

A ハッハッハッ。それどころじゃないよ。ヘラクレイ

トス派に属し、プラトンの師でもあったクラテュロスは、師ヘラクレイトスが「ひとは二度と同じ河にはいれない」といったことを不十分として、「ひとは一度も同じ河にはいれない」といったんだ。<sup>(20)</sup>

B えっこれはショック。まったく鬼面ひとをおどすというやつだね。一体どういう意味なんだ。

C ぼくに説明させてくれないか。多分こうだろう。河は時々刻々と変化し、たえず別ものとなっている。とすれば、河の同一性などはじめから存在しない。そういうわけで、ひとは一度も同じ河にはいれないんだ。それにもし、はいる側の人間の方も同一性がないとしたら、まして同じ河かどうかわかりはしない。

### 五 《リヴァー・パラドクス》の再定式化

B ウーン、どうも詭弁くさいなあ。もう少し論理の明瞭さと分析のプロセスが必要だと思ふけれど。

A どうやるんだね。

B 「われわれは同じ河にはいりかつはいらぬ」という《リヴァー・パラドクス》は、矛盾律に背反しない形で再定式化できる。まず河を二つの構成部分にわけると、

流水の部分と固定した河岸、河床などの部分だ。流水は河の可変部分であり、河岸などは河の不変部分とみなせる。どちらも河にとり不可欠だろう。水が流れていなければ河ではなく、ただ水だけあっても河とはいえない。

《リヴァー・パラドクス》を再定式化すると、こうなる。——われわれは同一の地点から何度でも同じ河にはいれる。土手をおりて浅瀬から深みへとね。しかし、水はたえず流れているから、つぎの瞬間にはいり直したとしても、もう同じ水には触れない。足の裏は固定した河床を踏んでいるが、体にさわる水はつねに変化している。だから、ある意味で、つまり固定した土手から河床へと歩む限り、われわれは二度でも三度でも同じ河にはいれる。けれども、別の意味で、つまり流水の面からすると、二度と同じ河にはいれない。「ある意味で*カ*、別の意味で*ケ*」——こういえば、矛盾律に違反しない。《リヴァー・パラドクス》はこう分析されてこそ、論理的に明瞭になる。いかがかな。

A なるほど、クリアだ。

C たしかに明瞭だが、ひとつ疑問がある。では、どうしてヘラクレイトスはアンチノミーとかパラドクスをわ

ざわざ使ったのかな。はじめからきみのいうように定式化してくればよかったのに。

B きみのいいたいことは、アンチノミー的表現のもつ認識論的機能は何かということだろうね。なぜはじめから矛盾律に即した表現をしないのかといえ、それこそレトリックの問題であり、発話行為をするひととそれをうけとるひととのコミュニケーションの問題ではないかと思う。つまり、アンチノミーやパラドキシカルな表現は聴者／読者に対して、さらに自分自身に対しても知的挑発を行なうものだろう。反矛盾律的な表現をして思考を刺激し、そこから、どうしたら筋のとった無矛盾的な表現ができるかを考えさせる。 $P \supset \sim P$ と表現されたとき、そこから、この意味で $P$ 、あの意味で $\sim P$ と分析することは、実はそう簡単なものではない。 $P \supset \sim P$ という表現でとどめておくのは一種の知的怠慢であり、分析の拒否に通ずるものだ。そこからさらに論理的に精密化し(Elaborate)、分析をほどこして無矛盾的に確定された表現にいたることが必要ではないか。ヘラクレイトスやヘーゲルのように、 $P \supset \sim P$ と云って得意然としてい(21)るのでは困る。

A なるほどねえ。アンチノミーないしパラドクスは思考を刺激し、挑発するという認識論的役割をもっているわけか。そうすると、ヘラクレイトスは哲学史上の偉大な知的挑発者ともいえるね。

やはり同じ古代ギリシアで、エレア派のゼノン(前四六〇年頃)が唱えたいくつかのパラドクスがあるね。

「アキレスは亀を追いつかせない」、「飛ぶ矢は飛んでいず、静止している」などの命題だ。あれなども現代にいたるまで、空間、時間、無限、連続と非連続などのテーマと絡んで、多くの哲学者、論理学者、数学者を悩ませてきた。そしてヘラクレイトスの《リヴァー・パラドクス》でいえば、現にわれわれ三人が知的挑発にのって頭を悩ましているんだからね。

C B君の主張は認めよう。実はソ連のI・S・ナルスキーという弁証法や論理学の研究者も、ほぼ同様のことをいっている。マルクス『資本論』にある有名な定式「資本は流通のなかで発生しえないのと同様に、流通から発生しえないのでもない。それは流通において発生しなければならぬと同時に、流通において発生してはならない」——このアンチノミー的表現は、ナルスキーに

よって《アンチノミー問題》と呼ばれる。かれはこの《アンチノミー問題》を、解決されるべき問題の有効な表現形式とみなしている。<sup>(23)</sup> だから、かれは  $M \rightarrow M$  というアンチノミー的表現を弁証法的矛盾の十分な表現とはみないんだ。

B 『資本論』についてはあまり詳しくないので、少し説明してくれないか。

C さっきのアンチノミー的表現は「貨幣の資本への転化」という章でみられる。問題は商品が生産され流通している社会で、どのようにして資本家による価値増殖が、つまり利潤の増大が可能になるのかということなんだ。もし貨幣を介して商品の等価交換が行なわれるとしたら、いつまでたっても価値増殖はおこなない。そこには

$M \rightarrow G \rightarrow M$  または  $G \rightarrow M \rightarrow G$   $M = 商品$ 、 $G = 貨幣$   
という無数の系列があるだけだ。でも、資本が増大するということとは

$G \rightarrow M \rightarrow G$   $G = 価値の増殖$   
という価値増殖が生ずることを意味する。

では、前期資本主義のケースを考えよう。明らかによろしく、ここでも総量としての価値はふえない。詐欺や相

手の無知、無力につけこんで一方が富み、他方が貧しくなることはあってもね。

現在、市民社会上の契約によって、当然にも商品の等価交換が原則とされており、他方、資本の増殖・蓄積は驚くほどのテンポで進んできた。もちろん、経済学的にいえば、すべては流通部面をとおしてはいりこんでくる以外になく、しかも流通では等価交換が原則となる。マルクスはここでさっきの《アンチノミー問題》を出し、有名な文句を吐く——「以上が問題の条件である。ここがロードス島だ。ここで跳べ。」<sup>(24)</sup>

A そうか、そうすると、マルクスの《アンチノミー問題》はB君のいう「知的刺激」に近いのか。それで、マルクスの解決は、労働力という特殊な商品を見出すことにあるわけだね。労働力の消費(＝労働)は価値増殖をするからね。

B 弁証法家のマルクスは意外にも分析を重んじたわけだ。概念の神秘的な自己展開をいうヘーゲルとは違うわけだ。マルクスにとって、矛盾律を守ることは多分、不可欠で、弁証法的矛盾も論理的矛盾とは別ものなんだろう。それなら文句はないんだが……。

六 あらたなる展開へ

C 問題はかなり片づいたようだけど、だが、もうひとつ気になることがある。それはほかならぬ《リヴァー・パラドクス》のことなんだが。

きみが河を可変部分と不変部分に分析したね。この区  
分にはぼくも賛成したい。それで問題というのは、この  
両部分はまったく別ものでないということなんだ。河の  
流水部分と河岸、河床は相互に作用しあっており、この  
両者が合してはじめてひとつの河となる。そうではない  
か。流水も河岸、河床に制約されて一定の方向に流れる。  
ところが他方、流水こそが長い間には河岸を削り、土砂  
を蓄積したりしてコースを少しずつ変えていく。流水が  
極端にふえたりすれば、コースもダイナミックに変化す  
る。<sup>(25)</sup>

B その場合、河の両部分がひとつのシステムをなすとい  
ってもよいのかな。

C そういってもかまわない。それがヘーゲルやマルク  
スの弁証法的体系のことならぬ。

A そうだとすると、《リヴァー・パラドクス》を「あ

る意味でP、別の意味で~P」と再定式化するだけでは、  
話は終わらないわけか。多少やっかいになるね。

それとぼくからも君に疑問がある。きみの説明は鋭い  
と思っただけれど、ヘラクレイトス自身が河を両部分にわ  
け、そこに相互作用を考えていたかどうか。

C そういわれれば、ヘラクレイトス自身に即して厳密  
に考えたわけではない。

B 生産的誤解というやつかな。疲れた。少し一服しよ  
うよ。タバコ吸ってもいいかね。最近タバコをやらない  
ひとがふえたんで、喫煙者は肩身の狭い思いをしています  
よ。

—— 一時休憩 ——

A ヘラクレイトスだと、流水はもちろん河岸だって少  
しずつ変化しているとみるかもしれない。つまり、河の  
すべての部分は程度の差はあれ、たえず変化している。

それでもそこにある河の同一性は変わらない。たとえば、  
中国の黄河の場合だが、この河はしばしば氾濫をおこし、  
そのたびに大きく流域とコースを変えてきた。あれほど  
水路を北へ南へと変えた河も珍しい。それでもやはり、  
その河は黄河といわれる。つまり、河のすべてが変化し

ても、黄河の同一性は保たれる。

C とすると、河を可変部分と不変部分とにわけること自体に問題があるのかな。でも、よく考えよう。

なぜコースや流域が変化したかというのと、流水量が急に増大し、河岸をのりこえて氾濫し、河床を削り、土砂を押し流し、また新しくコースをつくったからだろう。

そこで再び流れは新しい河岸のなかに収まる。いわば、流水という内容が河岸などの形式を産出しながらも、逆にその形式が内容を制約する。流水を内容ととり、河岸、河床を形式ととるのに異存はないだろうね。そして、この両者の弁証法的相互作用のなかで内容が主導的になる。

だから、内容と形式は対等ではない。それと、形式的側面である河岸なども単に相対的に不変ということで、やはり変化を免れない。こうして、流水(内容)と河岸、河床(形式)とのダイナミックな相互作用そのものが河という現象の全体というわけだ。

A なるほど。そうすると、逆にそこまで考えなかったヘラクレイトスに不十分性があるというわけか。そういうえば、かれは水量の増減が河を変化・発展させるなどとはとくにいていない。現代的観点からいうと、河は浄

化作用をしたり、多くの生物の生息地になったり、まあ、いってみれば、エコロジ的な意味で重要なんだろうね。単なるドブ河は死んだ河だ。河は生きている。話が少し脱線してしまった。

B ヘラクレイトスには直観的に全体をみる能力はあるが、分析がないということか。ぼくは《リヴァー・パラドクス》を解決しようとして河を二つの構成部分にわけたが、このように分析したうえで両者の相互関係を探るというのなら話はわかる。分析から総合へという道すじだね。

それから、アンチノミー的表現はやはりそのままでは不十分なわけだね。この点ではぼくらは一致したと思う。アンチノミー的表現は論理矛盾の明確な形態だから、どっちも明確にかつ具体的に再定式化される必要がある。弁証法的認識といっても、やはり最終的には矛盾律を回復するのだろうね。アリストテレスもいったとおり、どうしてもひとは反矛盾律的には思考できないのだから。

C 弁証法も何らかの形で矛盾律を守っているということとは、そのとおりだと思う。ぼくたちのやってきた議論も別に矛盾律を犯してはいなかった。

ただね、ひとつだけいわせてもらうと、伝統的形式論理学では矛盾律は、同一律(A $\parallel$ A)や排中律(AはBであるかBでない)と並んで自明の思考の原理とされているけれど、弁証法ではそれが中心テーマとならない。矛盾律は論理的首尾一貫性を守れという形式的規則にすぎず、思考の内容に関係しない。ところが弁証法は現実の思考内容に食いこむものだ。だから、矛盾にぶつかったら、とにかく矛盾しないように再定式化すればオーケーということではすまない。ソ連の唯物弁証法家E・V・イリエンコフによると、弁証法は矛盾を除去するための方法という面と、さらに、対象をより深く認識するさいにその矛盾を具体的に解く、という高次の役割をもっている<sup>(26)</sup>。たしかに、形式論理にはこの後者の面が欠けている。だから、矛盾を除去するといっても、形式論理と弁証法とは雲泥の差がある。

A この種の議論はプラトンやアリストテレス、いや、「ありはあり、あらぬはあらぬ」といった、パルメニデスあたりまでに遡るね。

## 七 結語と余談

C やあ、だいぶ時間がたってしまった。ヘラクレイトスについては本当に勉強になった。助かったよ。

B 「三人よれば文殊の知恵」というが、生産的な対話になったようだね。分析の必要性と、弁証法も矛盾律を守ることに、これが今日のぼくの成果だな。

A 学生時代はこういった議論や、政治、社会の問題について、さらに人生の意味や恋愛などについて、徹夜で話したこともあったね。当時は学生運動も活発だったし。いまの学生がぼくたちの議論を聞いたらどう思うかね。

B ぼくたちの学生時代のこととは想像もつかないだろうな。いまの学生はじっくり考えたり、議論したりはしならしい。哲学の評判が悪くなるわけだ。就職などの実際上の必要や趣味的生活のために要領よく考え、判断するだけだね。かれらにとって、情報交換や冗談をいうことがコミュニケーションの中心なんだ。本音を出して議論するのはダサイし、実は傷つくのがこわい。でも情報収集はすばやい。情報化社会のおとし子だし、メディア人間だからね。

受験勉強で輪切りにされて画一化され、本当の個性などない。まあ、重たい現実などみようとしないし、自然

と精神的視野狭窄に陥る。軽薄短小の世代だからね。

C だいぶ厳しいね。でも、社会学者やマスコミがおもしろおかしく若者にレットテルをはっている面があるのではないか。「モラトリアム人間」、「カプセル人間」、「やさしさの世代」、「宇宙人<sup>エイリアン</sup>」、そして最後に「新人類」。だけど、ぼくが講義で学生にとったアンケートによると、自分を新人類と思っている学生は一割くらいしかないなかつた。多くの学生が「新人類」をマスコミのでっちあげだとみている。

B だがね、新人類はそもそも哲学や論理学の講義などとならない！

C アハハ。もっともね、そういう話を友人にしたら、それこそいまの学生が自分たちの世代の特殊性を自覚していない証拠だ、かれらの歴史感覚の欠如こそが問題だ、と主張され、ナルホドと思っただけだね。でも、まじめに考えようとしている学生もいないわけではない。

A あまりにも時代が忙がしくなりすぎたね。情報に追いまくられ、ゆっくり考えている暇がない。古代ギリシア哲学などやっている人間はもう「化石」か。

C 実は、大学生ではないけれど、以前に高校レベルの

教研集会に参加したことがある。そこで発表した先生が青年期の非行の底にあって、若者の特徴であるものとして四つほどあげていたのを記憶している。ひとつは閉鎖的自己本位というものだ。親や教師に注意されると、「別に迷惑をかけていない」、「関係ないだろう」とくる。

二つ目は文化的同調の強制だ。この背後には大企業 of 文化支配やマスコミの影響がある。テレビの人気番組をみていないと仲間はずれになる。第三は個性的な人間や弱者など、平均的でない者への迫害だ。いわゆる「いじめ」の現象だね。帰国子女に対する「外国はがし」というスタイルのいじめもあるそうだ。ま、結局、皆と同じにしていれば安全ということで、主体性や問題意識など育ちはしない。第四は人類的なもの、人間的なものへの破壊的態度であり、権力や暴力の肯定だ。

B 小学校、中学校、高等学校と徹底して管理され無力化されてきた生徒が大学へくる。大学レベルで何とかしようと思っても、もう遅いね。

A ヘラクレイトスをめぐってやってきたぼくたちの議論は、ただ哲学上の専門の知識があればできるというものではない。若い頃にたえず議論をしてきた結果だろう

ね。一種の訓練だね。実際、ぼくたちのうへの世代の研究で学問的に議論する能力のあるひとはそれほどいないと思う。

B 学生や若者だけではなく、いまのように精神的に疲れる社会では、だれでも波風たてずに生活したいと思う。そのなかで相手に異を唱えたり、逆に相手からまともに反論されたりするのは不愉快なものだ。人間は感情の動物だからね。そして議論は結果よりもいろいろと展開していくプロセスを重んずるから、面倒臭くもある。ひとの考えをいちいちまともに聞いていたら、やってられない。対話・議論することが必要だということは一般論としてわかるが、お互いに好き勝手なことをいうものだからとてもやり切れない、とかね。

そうでなくとも、日本人は対決し議論を避けたがる。根回しと下相談が重要で、「気配り」や「腹芸」的コミニケーションが中心になる。

C だからこそ、対話能力の実践的形成ということが大切で、これこそ民主主義にとって必要な要素だと思う。

A そこで、古代ギリシアの対話・問答法ダイアレクシケーに帰れというわけか。たしかに、ソクラテスやプラトンのディアレク

ティケーは市民間の対話であり、専門家内での講壇哲学とは違う。ソクラテスの「無知の知」にあるように、対話のなかで自分の独断や偏見があげられるし、また、信頼関係も生ずることがある。いまでこそ、ソフィストという白を黒といいくるめる「詭弁家」のことと思われるが、古代ギリシアの前期ソフィストのプロタゴラス、ゴルギアス、プロディオコスらはもっと健全で、当時のポリスの民主社会のなかで若者に政治的教養や弁論術を教えるひとびとだった。「ソフィスト」、ギリシア語でいうと *sophists* だが、このことばのものと意味は「智者」、「賢人」のことだった。それが後期ソフィストになり、本当に「詭弁家」の意味になってしまった。

対話とは単なる自己主張や意見の披瀝でなく、相手の主張と発想に耳を傾けることを含む。頭を柔軟にしないとやれない。自分の主張をたえず相対化することも必要だろう。でも、いうは易く、行なうは難し。

C そうだからこそ、教育のなかで小さい頃から議論と対話の訓練をすることが必要なんだ。

B ぼくも賛成だね。西洋人にとって、形式論理学はもとも議論のための術だった。論理的思考は対話と説得

のなかで鍛えられるし、現実性をもつからね。

この拙稿は四、五年前に論理学の議義で学生諸君と議論したときの産物といってよい。当時わたくしはヘラクレイトスの《リヴァー・パラドクス》をテーマにして、それに関するノーマンとセイアーズの論争を紹介しつつ、講義を進めていった。そしてセイアーズの解決法に疑問をもった学生——明確に問題視したのは二名ほどだったと思う——と質疑応答をした。そのさい、学生側から反論のレポートも出され、学生相互も議論を交わした。結局、かなり討論したにもかかわらず、学生諸君も納得せず、わたくし自身もこれらの主張を明確に理解しえなかった。レポートをした学生も自分の主張を明確に理論化できず、もどかしげであった。《リヴァー・パラドクス》の問題はそれ以後わたくしの心のなかに残った。そして当時の学生諸君が何をいいたかったのが、あとになり段々とわかってきた。わたくし自身の解釈にも不十分な点があったのである。

拙論で《リヴァー・パラドクス》が十分に解決できたかどうか心もとないが、もし拙論の展開に何らかの説得力があるとすれば、それは当時の学生諸君との議論のおかげである。講義に参加し、議論の輪に加わった当時の学生諸君にここで感謝したい。

- (1) ヘーゲル『哲学史』(武市健人訳)上巻、岩波書店、一九七四年、三六二頁を参照。なお、ヘーゲル自身が強調するように、論理学におけるヘラクレイトスの生成の思想は、有―無―成の論理展開のなかの「(生)成」概念に對

応する。ヘーゲル『大論理学』(武市訳)上巻の一、岩波書店、一九六七年、八〇―八一頁を参照。

- (2) 古在由重『著作集』第一巻、勁草書房、一九七三年、三五六頁以下を参照。

(3) Vgl. Helmut Seidel, *Von Thales bis Platon*, Dietz Vlg. Berlin, 1980, S. 59ff.

(4) ローニン『哲学ノート』(松村一人訳)第二分冊、岩波書店、一三六一―一六〇頁。

(5) Hermann Diels/Walther Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 1, Weidmann, 1974. 以下「ソクラテ

スの断片の番号はこの書によって本文中に記す。訳については、Diels/Kranzの独訳、山本光雄訳編『初期ギリシア哲学者断片集』岩波書店、一九七四年、Kahnの英訳(後出)、ハーネットの著作による翻訳(後出)などを参考にさせて頂き、和訳を試みた。

(6) Charles H. Kahn, *The Art and Thought of Heraclitus*, C. U. P., Cambridge etc., 1983.

(7) Platon, *Craylus*, p. 402 A.

(8) 眞方忠道「ヘラクレイトス——『ペンタ・レイ』のロソテクストについて」、『現代思想』三月臨時増刊、青土社、一九八二年を参照。

(9) ジョン・バーネット『初期ギリシア哲学』(西川亮訳)以文社、一九八二年、一九一頁を参照。

(10) ローニン、前掲書、一五一頁。

- (11) たゞは、カーンの説を参照。「ディールヌスは、ヘラクレイトスの中心的な洞察を、魂 (psyche) の内的・人格の世界と宇宙のより大きな自然秩序との間の構造の間の同一性で結ぶたが、このことはむしろ「たゞ信する」(Kahn, *Op. cit.*, p. 21.)。
- (12) たゞは、岩崎允胤・嵯坂真編『西洋哲学史概説』有斐閣、一九八六年、一五頁を参照。
- (13) See Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, Unwin Paperbacks, London etc., 1979, p. 59. トンク・マヤン『西洋哲学史』(市井三郎訳)ナサキ書房、一九六三年、五〇頁。
- (14) See George Novack, *The Origins of Materialism*, Pathfinder Press, New York, 1979, p. 98.
- (15) Diels/Kranz, *Op. cit.*, S. 233.
- (16) Aristotle, *Metaphysics*, 1005 b 19 f.
- (17) *Ibid.*, 1062 a 30 ff.
- (18) Platon, *Op. cit.*
- (19) See Kahn, *Op. cit.*, p. 167.
- (20) See Aristotle, *Op. cit.*, 1010 a 10 ff.
- (21) 以上の意見は、Richard Normann/Sean Sayers, *Hegel, Marx and Dialectic*, The Harvester Press • Sussex/ Humanities Press • New Jersey, 1980. の第4章ノーマン・Sayers (p. 50) を参照。
- (22) Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Dietz Vlg., S. 180. マルクス『資本論』(長谷部又雄訳)第一部・上、青木書店、三三三頁。
- (23) 同、I. S. Narski, *Dialektischer Widerspruch und Erkenntnistheorie*, VEB Deutscher Vlg der Wissenschaften, Berlin, 1973, S. 49 ff. ナンスキーの紹介として、岩崎允胤『現代唯物論とその歴史の伝統』北海道大学図書刊行会、一九七三年、一一〇頁以下を参照。
- (24) Marx, *Op. cit.*, S. 181. 翻訳「同頁」。
- (25) 同、Norman/Sayers, *Op. cit.*, の第4章ノーマン・Sayers (p. 113 f.) を参照。
- (26) See E. V. Il'yenkov, *Dialectical Logic*, Progress Publishers, Moscow, 1977, p. 190.

(一橋大学助教授)